

2年目に入って

会員 尾関 瑛子

令和4年12月に登録をし、1年が経過した。この記事が掲載される頃には登録から1年半近くが経過していることとなるが、2年目に入ったこの時期に光栄にも執筆の機会をいただいたため、1年目を振り返りつつ2年目以降の方向を改めて考えてみたいと思う。

1 業務に関して

1年目は目の前の案件にひたすら取り組んでいたのみであったため、あまり強くは意識していなかったが、振り返ってみれば幅広い業務に携わることができていたように思う。弁護修習先の事務所は個人の依頼者が多かったため、企業からの相談というものにあまり馴染みはなかったが、1年目においては比較的企業からの相談が多かったように思う。どちらが困難であり、どちらが易しいという優劣を決めることは決してできず、それぞれに悩ましい点が多々あった。

依頼者の利益の最大化、というのが弁護士として求められることであると修習時代にも各教官や多くの先輩弁護士から教えていただいたが、実際の案件を目の前にすると、依頼者にとって不利益となる事項が実は少なくないという事実と直面することとなる。それらの事項を依頼者にどのように伝えるかということの答えは簡単には見つけにくい。このことに関して、多くの先輩弁護士に相談してきたが、ある弁護士から「依頼者を現実に向き合わせることも弁護士として大事なこと」というお話を伺い、それ以来このお言葉が私の心の拠り所となっている（余談とはなるが、これまでに何度も鑑賞した、ドクターヘリを題材にした某ドラマにも似たようなシーンがあり、今改めて鑑賞するとつい感情移入してしまう）。きっと、この仕事を続けていく上で絶えることのない悩みであると

思うが、悩みつつも少しでも前に進んでいけたらと思うばかりである。

2 東弁との関わり

弁護士会照会を要する事件や刑事事件を1年目に扱ったが、わからないことが多く（特に、必要書類の記載方法や各書類の提出先といった手続面）、東弁の職員の皆様には大変ご迷惑をお掛けしてしまいましたが、大変親切にご教示いただき感謝の気持ちでいっぱいである。

また、登録してから、様々なご縁があり、1年目ながら東弁の活動に数多く参加させていただき貴重な経験を積むことができた。一つの活動・業務であったとしても、多くの会員の協力の上で成り立っているという、当たり前の事実改めて気付かされる日々であった。そして、日々の業務と並行しつつ会務活動を執行行っておられる多くの当会会員の先輩方の姿を近くで拝見し、ただただ尊敬の念を抱くばかりであった。私は先輩方の恩恵にあずかっているだけであったが、多くの先輩方とお会いしお話しさせていただく中で、「忙しいときほど、謙虚に」というお言葉をいただいたことは私の中での財産である。

3 2年目以降

これまでも、あまり細かな目標を立てるのは得意ではなかったが、既知の分野であっても初心に立ち返って取り組む、未知の分野であっても粘り強く解決方法を模索する、という姿勢を持って日々の業務に取り組んでいけたらと思う次第である。

そして、人とのご縁をより一層大切に過ごしていきたいと考えている。